

(仮称) 第3次帯広市食育推進計画策定に関する意見交換会要旨

日時 平成28年5月27日(金) 13時30分～15時30分

場所 市庁舎10階第5A会議室

参加者 食育推進サポーター 8団体・個人計9名

○意見交換

テーマ1

児童・生徒の朝食を欠食する割合が増加したこと、食事を家族などと一緒に食べる割合が減少したことについて、どのように考えるか。

(現状)

- 低学年の子ども達が朝食を欠食することと、高学年の子どもが欠食することは、背景が違う。
- 学年が上になるほど、朝食を食べない子どもの割合に増加傾向が見られる。
- 大学生も欠食が多い。夜更かし等で生活リズムが崩れているのが現状である。
- 家庭で子どもたちの朝食が用意されていないことがあると聞く。

(原因)

- 朝食を食べない原因は様々だと思う。塾や部活、習い事等による就寝時間の遅れに伴い、起床後、朝食を食べる時間がないと考えられる。
- スマートフォンの使用が原因の一つと考えられる。絶えず、友人に返事をしないと仲間はずれになってしまうことから、気になって就寝時間の遅れにつながっているのではないか。
- 朝食を食べないことが習慣化している大人がおり、それが子どもにも影響している。子どもに朝食を食べさせるためには、大人の意識付けが必要。
- あまりに世の中が便利になり、お金さえあればコンビニで何でも買えるようになり、料理を作らなくなる親が増えているのではないか。

(対応等)

- 学校に出向いた際には、子どもたちに常々、朝食が大切であることを伝えている。

子ども達に、朝食を食べてこなかった日は1日どうであったか質問し、自分で考えさせることにより、朝食は大切だということを理解させるようにしている。

○帯広は食料自給率が高い地域なのだから、私達、食育推進サポーターが力を合わせて、意識変革していきたい。

○栄養相談等を実施しているイベントなどがあるが、相談に来る人は、正しい食生活に対する意識が高い人であり、来ない人のほうが問題を抱えているように思う。

○ある高齢者施設では、夕食は6時であり、朝食が7時頃から始まる。夕食を食べてから翌朝を迎えるまでの間に空腹の時間をつくるのが朝の食欲につながると思う。

○短期的に効果を上げるのであれば、学校での授業が有効だろう。
長期的な視点では、大人への教育が課題である。親の意識を変えることは、大変なことなので、次世代の親となる高校生に向けた教育を実施すべきと考えている。

○朝食を欠食する市民の割合の目標は10%以下となっているが、1%以下が好ましい。

テーマ2

食育に関わる中で、日頃から思うことや感じることに對して、どのような形で取り組んでいきたいか、また、社会全体としてどのような形で取り組むべきと考えるか。

○学校給食にアスパラを提供し、小学生と一緒に給食を食べた。すごくアスパラが好きだと言ってくれる子がいたが、普段は、野菜が苦手だと担任から聞き、子どもなりに気を遣っていると感じた。顔が見える生産者となっていくことが大切だと思った。

○学童保育で、食育の取組を行うことも非常に有効だと思う。また、学童のおやつで、市販のスナック菓子が提供されているところがあり、地場食材の提供などに工夫していくことも必要と感じている。

○家庭での食育が重要であると考えますが、子育て世代の食や栄養に関する知識が不足していると感じている。空腹を満たせばよいと考えている大人が多いのではないかと。原因としては、食に関わる体験をする機会が少なかったことが、食に対する意識の低下を招いているのではないかと。この状況を連鎖させず、幼い頃から農業体験など食に関わる体験をさせることが重要。

- 家族など、誰かと食事を共にする経験をすることが大切だと考えている。皆で美味しい食事をし、楽しい時間を共有することで、食を大切にすることにつながっていく。
- 昔は食育基本法というものはなかった。なぜ、当たり前のことを法律にしないといけないのかと感じたが、法律にしなければならないほど食生活が乱れている人たちが増えている状況にあるということだと思う。
- 保育園などの一角で、農家の人に来てもらい野菜の直販をしていた事例がある。あまり売れなかった。原因として、親が野菜を買っても時間がなく料理ができなかったり、余計な出費と考えている人が多いと聞いた。地元のものを買って調理をして食べている人の割合はどのくらいいるのだろうか考える。
- 共働きの世帯が多くなり、家事が負担と考えている状況で、これ以上何かするのは、なかなか難しいのではないか。今の時代に合った仕組みが必要で、保護者に頼るのではなく、地域などが一体となって子ども達を支えていきたい。
- 特定保健指導をしていると、働き世代の人や、若い人の肥満が結構多いと感じている。この人たちが子育てをしていくことになるので、特定保健指導を絡めて、食育に取り組む必要があると思う。
- 本州の子どもたちに農業体験をさせている。都会だから農業体験が乏しく、田舎だから豊富だということはない。帯広の子どもたちは全体的にみて、もしかしたら都会よりも体験が乏しいのかもしれない。

テーマ3

地域で取り組む食育についてのご意見を伺う。

- コミセンなどを活用した、高齢者の「サロン」という取組があり、高齢者が集まって食事をしている。独居で、一人でごはんを食べるのが面倒、作れないということが多く、何人かで集まって食べれば食事も美味しく、楽しいものとなる。
- 「サロン」というのは、健康な高齢者を増やすことなどを目的に、市内に20～30近くあり、活動内容は、軽い運動や体操だが、栄養に関する知識を学ぶ機会としたらよい。
- 町内会活動としてサロンに食事を定期的に提供する取組ができたらよい。食に対する栄養について啓発と実践をするような場として更に活用してはどうか。

※高齢者まちなか交流サロン・・・高齢者の介護予防に資することを目的とし、高齢者等の交流を中心とした高齢者に対する多様な事業を実施するもの。

- 帯広の「こども食堂」の運営はすべてボランティアが行っており、全国的にもボランティアが中心に運営しているという状況。行政や団体などと連携しながら運営できる仕組みを考えないといけない。
- 行政にしても企業にしても、仕事をするためには予算が必要。非常に大切な「食育」に関わる予算を確保し、そのうえでボランティア活動もあると考える。
- 健康な生活を送るため、最も大切な「食」について、無料で教えてくれる「食育推進サポーター制度」は、とてもよい制度である。しかし、制度を知らない市民が多いので、地道であるが、こつこつ継続してPRをしていくべき。

その他

- JAの青年部では、小学校にいもなどの種子を無償で配布しているほか、学校を訪問して栽培技術などを教えている。農業者の人たちも子ども達へ分かりやすく教えるために勉強してから学校に赴くので、お互いに理解が深まるようになり、良い取組だと思っている。
- 野菜などを自分たちで植え、世話をし、そして収穫して食べることはとても意味のあることだと思う。
- 子ども達に、「朝食を食べてきたか、何を食べてきたか」などと質問するが、だいたいパンと答える子どもが多い。ごはんは1割～2割。急速に米の使用量は減っている。少数だが、シリアルを食べている子どももいるが食べているだけ良いと思う。
- 一般のアンケートでは野菜等を買うとき、国産より外国産のほうが安いから買うという答えがある。未だに安ければ何でもよいのかと考える。値段を考えず地元産を優先的に手に取るなど、食の安心安全という観点を重視させる取組が更に必要である。
- 食の安全安心を追及していくと、有機栽培等の野菜に至り、その分、付加価値が高まるので、値段が高くなるということをもっと理解してもらう必要もある。